



対話的解釈学と「二人称の科学」

中 川 吉 晴

(同志社大学社会学部)

Dialogical Hermeneutics and the Second-Person Science

NAKAGAWA Yoshiharu

(Doshisha University, Faculty of Social Studies)

武藤崇教授は論文のなかで「二人称の科学」を提唱し、今後の議論の端緒を開いている。対人援助は、人と人との対面的な状況を基盤にしている以上、他者とのかかわりを「二人称の科学」の観点からとらえることは必要不可欠なことである。しかし不思議なことに、これまで「二人称の科学」が真剣に議論されることはほとんどなかったように思われる。武藤教授は行動分析学の観点から「二人称の科学」を構想しているが、私は行動分析学に関してコメントをできるほどの知識を持ち合わせていないので、本コメント論文では「二人称の科学」ということで私自身に関心のあることについて述べさせていただくことにする。

武藤教授は議論を始めるにあたって、ドン・ジョンソンとユージン・ジェンドリンによる「一人称の科学」の構想に言及している。カリフォルニア統合学大学院 (CIIS) のジョンソン教授は、ソマティック心理学を専門とし、以前立命館大学大学院応用人間科学研究科の客員教授として三度来日したことがある。ジョンソン教授はさまざまなボディワークの研究で知られ、ボディワークを学問的研究の場に引き入れることに尽力してきた (Johnson, 1995, 1997; Johnson & Grand, 1997)。一方、ジェンドリンは、ロジャーズの共同研究者として、そしてフォーカシングの開発者として日本でもよく知られている。ジェンドリンのフォーカシングでは、フェルトセンスという微細な身体感覚にフォーカスしていくため一人称の経験過程が重視される。このように二人とも身体化された経験の学問的研究を志向しており、

しかも両者とも現象学的哲学から出発している。このような背景のもとに「一人称の科学」が提唱されているのである。

「一人称の科学」は、現象学で言われる主観的な意識の流れを見ていくため、基本的に独語的アプローチをとる。これに対し「二人称の科学」は、他者との相互作用、かかわりを基盤とするものであり、基本的に対話的アプローチをとる。しかし、「二人称の科学」のスタイルをとって他者にかかわるとしても、自分がすでにもっている認識の枠組みを持ち込み、そのなかで他者を理解するのであれば、それは自己理解の投影や延長にすぎないであろう。それで本当に他者を知り、理解したことになるのだろうか。「二人称の科学」の難所は、まさにそれが前提とする他者の他者性をいかにとらえるのかということである。

極論のように聞こえるかもしれないが、「二人称の科学」というのは、他者を既存の枠組みでとらえることができず、相手のことがわからず、自分の知らない異質なものがあるといった他者理解の困難さや限界から出発するものではないだろうか。なぜなら、そのような事態のなかでこそ、他者はその完全な他者性をもって、私のなかに存在しているからである。他者性というのは、他者が自分の外部にあって見知らぬ存在だということ、すなわち、測り知れないということである。しかし、こうした事態は対人援助の場面ではよく起こるのであるし、むしろ対人援助研究を根底で促すものだと言ってもよいであろう。そのような理解不能な事態のなかでどのような

ことが起こるのか、それを学問的場面に引き入れるにはどのような条件が必要となるのか、そのようなことが「二人称の科学」では重要になると考えられる。

ここで参考にしたいのは解釈学である。解釈学の展開のなかには、この問題に対するひとつの解答があるように思われる。解釈学の歴史は古く、古代より現代に至るまで多様な展開を遂げている。解釈学は古代・中世をつうじて古典や聖書などの文献を解釈するための技術論であった。そこではテキストの意味を一義的、客観的に確定することが目指された。その意味で技術論的解釈学は「三人称の科学」の立場に近かったと言える。こうした時代が長くつづいた後、19世紀から20世紀初頭にかけて活躍した哲学者のデイルタイ (Dilthey, 1958; Bollnow, 1980) は、みずからが提唱した精神科学を解釈学によって基礎づけた。デイルタイのいう精神科学は今日の間人科学に相当するものである。デイルタイは「生の哲学」を唱え、生の表現としての文化(客観的精神、客観態)の意味解釈を精神科学の課題とした。ここで解釈学はもはや文献解釈のための方法論ではなく、人間の生の構造にふくまれる「体験・表現・理解」の解釈学的循環(体験の表現を理解すること)から成る認識作用とみなされた。またデイルタイは「基礎的理解」ということを重視し、理解のもつ根源的な認識構成作用を明らかにした。つまり、私たちが何かを知ることができるのは、それに先立って、すでにいつでもそれを暗黙のうちに理解しているからなのである。これに対し、より明確な理解が必要とされる状況で「高次の理解」(解釈)が生じることになる。

明示的な解釈に先行する暗黙の理解は、その後ハイデガーによって「前存在論的存在理解」、ガダマーによって「先入見」、ボルノーによって「前理解」としてとりあげられた。たとえば『存在と時間』のなかでハイデガー (Heidegger, 1977) は、現存在(人間)は存在を理解するという様態で存在しているとし、これに対して明示的な解釈は、すでにいつでもある一次的な理解の派生態であるとみなした。このように解釈学は理解のもつ根源的な働きを発見したのだが、ここで「一人称の科学」にかかわる問題が生じる。つまり、私たちはすでにいつでも理解して

いるものを知るだけであり、そうであれば、理解の及ばないことは知ることができない、未知なる他者を知ることはできないという問題である。その後の解釈学は、二人称的経験を積極的に組み入れていくことによって、この問題を乗り越えていくことになる。

根底にある前理解の働きを認めた上で、なおかつ理解の及ばない他者を知ることは、いかにして可能になるのだろうか。未知の他者に遭遇し、前理解が妨げられ、相手のことがよくわからないという事態のなかで、私たちは他者の実存にふれる。ある意味で他者は、どこまでいっても到達できない謎であり、逆にそのわからなさのなかで他者は如実に到来している。その際、他者を既知の枠組みに還元して解釈しないなら、必然的に私自身の側の実存変容が引き起こされることになる。私は他者経験ををつうじて自分の理解を変更し、新しい理解を生み出さなくてはならない。これが二人称的状況である。

このような点を歴史理解に関連して明らかにしたのは、戦後のドイツを代表する哲学者ガダマー (Gadamer, 1960/1975) である。ガダマーは『真理と方法』のなかで、前理解としての「先入見」を指摘するとともに、他者の地平と自己の地平との「地平融合」を強調した。理解するとは、地平と地平の融合なのである。ガダマーは地平融合を「解釈学的経験」と呼び、これを解釈学の根本原理に据えている。言いかえると、理解とは自己と他者の実存的対話であり、ガダマーの有名な言い方では「およそ理解するとは、別の仕方理解すること」なのである。ガダマーに触発されて、アメリカの現代哲学者リチャード・ローティ (Rorty, 1979) は、共約不可能な見慣れぬものとの結びつきを因るのが解釈学的活動としての「啓発」(edification) であり、そのなかで私たちは古い自己から異質性の力によって連れ出され、新しい存在になるという。それゆえ啓発的哲学の要点は、客観的真理を発見するというよりも、むしろ対話を継続させることにある。

この同じ問題を深く追求したボルノー (Bollnow, 1981) は、前理解の解釈学に対して「経験の解釈学」を提唱した。ボルノーのいう経験とは、慣れ親しんだ世界に理解不能な「絶対的に新しいもの」が侵入

してくることである。こうした経験をすると、前理解は覆され、新しいものを有意味な分枝として組み入れるように拡大される。このように前理解と経験は循環関係にあり、理解そのものが他者経験をつうじて成長し発展する。ボルノーは「生の経験はたえず前理解の範囲を拡張し、その拡張された前理解の範囲とともに、人間は次にもっと広い経験へと進むのである」という。これが二人称の対話的解釈学であるが、それは新しい理解を生み出す創造的プロセスである。

このように二人称的状况では、他者の理解困難さをつうじて既存の前理解が更新され、新しい意味が生まれることになる。そこでは三人称的な客観性や、一人称的な主観性の探究ではなく、創発的な意味生成にその固有な学問的意義が認められる。そうであれば、二人称のアプローチを学問的に確立しようとするとき、どのような要件が求められるであろうか。ここでは創発的で創造的な理解を促進するような実存論的条件を取り出すことができるであろう。つまり、このようなプロセスを妨げることなく促進するためには、未知のものを受け入れる開放的な構え、既知の理解を手放す勇氣、未知のものへの信頼といった徳性が必要とされる。こうした人間の徳性を学問研究に組み入れることは容易ではないが、二人称のアプローチではそうしたことが求められると思われる。

そのための具体的な訓練としては、みずからの前理解にありのままに気づくことや、マインドフルネスのなかで前理解への執着を手放すことや、オープンな共感的態度で聴くことなどをあげることができる。

引用文献

- Bollnow, O. F. (1980). *Dilthey: Eine Einführung in seine Philosophie* (4th Ed.). Schaffhausen, Switzerland: Novalis Verlag. (ボルノー, O. F. 麻生 健 (訳) (1977). *ディルタイ——その哲学への案内* 未来社)
- Bollnow, O. F. (1981). *Philosophie der Erkenntnis* (2nd Ed.). Stuttgart, Germany: W. Kohlhammer. (ボルノー, O. F. 西村 皓・井上 担 (訳) (1975). *認識の哲学* 理想社)
- Dilthey, W. (1958). *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften* (7th Ed., Gesammelte Schriften Bd. 7). Stuttgart, Germany: B. G. Teubner Verlagsgesellschaft. (ディルタイ, W. 尾形 良助 (訳) (1981). *精神科学における歴史的世界の構成* 以文社)
- Gadamer, H.-G. (1960/1975). *Wahrheit und Methode* (4th Ed.). Tübingen, Germany: J. C. B. Mohr. (ガダマー, H.-G. 巒田 収・卷田 悦郎 (訳) (2008). *真理と方法 II* 法政大学出版局)
- Heidegger, M. (1977). *Sein und Zeit* (14th Ed.). Tübingen, Germany: Max Niemeyer Verlag. (ハイデガー, M. 原 佑・渡辺 二郎 (訳) (1971). *存在と時間* 中央公論社)
- Johnson, D. H. (Ed.) (1995). *Bone, breath & gesture: Practices of embodiment*. Berkeley: North Atlantic Books/San Francisco: California Institute of Integral Studies.
- Johnson, D. H. (Ed.) (1997). *Groundworks: Narratives of embodiment*. Berkeley: North Atlantic Books/San Francisco: California Institute of Integral Studies.
- Johnson, D. H. & Grand, I. J. (Eds.) (1997). *The body in psychotherapy: Inquires in somatic psychology*. Berkeley: North Atlantic Books/San Francisco: California Institute of Integral Studies.
- Rorty, R. (1979). *Philosophy and the mirror of nature*. Princeton, NJ: Princeton University Press. (ローティ, R. 野家 啓一 (監訳) (1993). *哲学と自然の鏡* 産業図書)

(2016. 11. 18 受理)

(ホームページ掲載 2017年5月)